

教育実習における図画工作・美術科鑑賞学習指導の検討 (1)

—図画工作・美術科教育実習生における問題点と課題—

三根 和浪 森長 俊六 天野 紳一 川口 浩
大和 浩子 岡 芳香 中本美奈子 菅村 亨
一鉄田 徹

1. はじめに

教員養成において教育実践力の向上は大きな課題である。そのため、将来の教員を育てる教育学部や附属学校にも教育実習指導の充実が求められている。本研究は、望まれる教育実習の在り方を図画工作・美術科の鑑賞学習を糸口に探るものである。

学校教育における図画工作・美術科の学習は、表現と鑑賞の2領域に分けられている。しかしこの鑑賞領域は、表現領域に比べて重視されてきたとは言い難い状況にあった。例えば、新関伸也は「表現領域に比較して従属的な扱いに終始されることになり、その指導方法やカリキュラム開発が十分になされてこなかった¹⁾」、石川誠は「鑑賞の実践が小・中学校で依然として広がりを見せない²⁾」、野上雅志は「題材に適した鑑賞方法が分からない³⁾」と述べるなど、鑑賞学習に関する問題点は多く指摘されている。

これらの問題点をふまえて、学習指導要領では鑑賞教育を重視する方向性が示されてきており、平成10年版小学校学習指導要領では、内容の改善の要点に「イ鑑賞の指導の充実⁴⁾」、同中学校学習指導要領でも内容の改善の要点「(イ)鑑賞に関する改善」で「鑑賞の指導が一層充実して行われるようにする⁵⁾」が示された。さらに、平成20年中央教育審議会初等中等教育分科会(第58回)で配付された資料「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について(答申)(案)⁶⁾」でも、「鑑賞の指導を重視する」とあり、今年度中に告示されるであろう平成20年版学習指導要領にもこの方向性は引き継がれると予想される。教育実習生は、表現の指導と同様に鑑賞の指導を行う力量を確実につけることが求められている。

そこで本研究では、上記のように問題点の多い鑑賞

学習を指導する力量を高めるために、教育実習生に対しどのように指導を行うことが適切なのか、改善を行うとすればどのようなことが効果的なのかについて検討することを目的とする。そのため、初年度にあたる今年度は、指導教員による教育実習(授業及び授業準備)状況の観察、教育実習生に対するインタビュー・質問紙による調査などを実施する。これらを通して、実際の教育実習において教育実習生が指導でつまづきやすい点や悩み・要望などの実態を明らかにし、得られた課題を整理する。第2年次には、これらをもとに教育実習校と大学での指導を改善する方策を検討し、学習環境や教育実習時の指導教材改善のために求められる条件整備などが何であるかを明らかにする。

(三根和浪)

2. 各附属学校で行われた教育実習における鑑賞指導の実際と課題

附属学校5校の共同研究者6名によって指導された教育実習生の抱えていた問題点を、実践の概要と共に事例報告する。

(1) 附属中・高等学校の事例

①教材を自由に設定させた授業

附属中・高等学校では、後期実習の終盤に実習生5人全員に対して鑑賞の実地授業を課した。教材や内容・形式など細かく指定すると負担も大きくなると考え、実習生各自に自由に考えさせ、それぞれの専門分野を生かしたもので工夫させることにした。そうすれば、それまでの研究成果を生かせるだけでなく、自信を持って授業に臨むことができると考えたからである。ちなみに時間も自由とした。しかし、実際に授業を行うまでには、指導案の段階で指導助言を行い、若

干の修正を行っている。

また、中学校の学級に配属されている3名については、比較的生徒の実態が把握できている配属学級での実践とした。

次に、実際に行った5例の実践について、それぞれの授業の概要と指導観察の結果を述べる。指導観察の結果は、授業観察や質問紙調査、インタビューの結果などをふまえたものである。

ア. 1例目（授業者の専攻はデザイン）

〈授業の概要〉

学年組：中学3年A組40名

教材名：「身近なもののデザイン鑑賞」

時間：25分

目標：身近なもののデザインに注目し、その奥の深さを知る。

〈授業の流れ〉

スクリーンに5種類の携帯電話を映し出し、機能や価格など、デザイン以外では差がないと仮定した上で、どれを選ぶかを選択させ、挙手させる。

次に数名の生徒に選んだ理由を答えさせる。その後、それぞれの携帯電話について開発のコンセプトや開発時のエピソード・苦労話などを紹介する。その時に生徒の感想との共通点、相違点に言及し、商品開発の難しさについて述べる。

最後に、身のまわりのいろいろな商品が、開発者たちの技術やセンスの結晶であると結んでまとめた。

〈指導観察の結果〉

教材研究は10時間を費やし、授業は周到に準備された。教材が携帯電話なので、生徒にとっては身近でもあり、関心は高かった。開発のコンセプトを聞く時には、生徒は完全に授業に引き込まれていた。

生徒から出た感想や印象を開発のコンセプトと重ね合わせた点や開発のエピソードに関連づけて説明した点は、内容的にも違和感が無く、説得力があった。

授業者は、この授業を含めた実習全体を含めて、話し方のスキルの重要性を実感していたが、しゃべり方の緩急や声の大小という点に関しては課題を残した。

イ. 2例目（授業者の専攻は絵画）

〈授業の概要〉

学年組：中学3年B組40名

教材名：「絵画の見方」

時間：25分

目標：絵画の鑑賞の視点として図像学があることを知る。

〈授業の流れ〉

ヤン・ファン・アイクの「アルノルフィーニ夫妻像」を取り上げ、パワーポイントを使って場面の状況や壁

のサイン、凸面鏡の絵柄や窓辺の果物など、あらかじめ計画していた順番に拡大画像を提示しながら、生徒に解説をしていくという内容であった。

〈指導観察の結果〉

描かれているモノについて、生徒に問いかける場面が多く、生徒も活発に反応していたが、指導者に比較的近い生徒の反応のみで授業を進めていく傾向がみられた。そのため、後方の座席の生徒は状況が掴みにくいことが多かった。また、板書についても蛍光灯を消したままのため見えにくかったりした。

パワーポイントの構成については、多くの拡大図を用意していたが、全体図をそれぞれの間にセットしていなかったため、その都度最初に戻って見せなければならないなど、情報機器の操作も含めて不手際が感じられた。

授業を行った教育実習生は、クラス配属であった。そのため授業実施までに生徒との交流があり、クラスの様子をおよそ把握出来ていたようだ。授業においてもコミュニケーションが取りやすかったとの感想を持っていた。

ウ. 3例目（授業者の専攻は工芸）

〈授業の概要〉

学年組：中学3年C組40名

教材名：「漫画鑑賞」

時間：50分

目標：漫画の表現方法を理解することができる。

〈授業の流れ〉

導入では、簡単なゲームを行った。内容は伝言ゲームの一種で、絵を使って伝達していくというもの。お題は「驚き」であった。

次に、漫画の多様な表現についてスライドを見せながら紹介していった。それは「吹き出し」「オノマトペ」や「怒りマーク」「汗マーク」などの漫画独特の記号、また「スピードライン」などである。

最後は、各自が持参した漫画本から漫画の表現を多く使ったコマを探し出し、トレーシングペーパーで写し取ってワークシートに貼るとともに、表現の種類を書き出すという内容であった。

〈指導観察の結果〉

提示する資料は、かなり豊富に準備されていた。

完成したワークシートを何人かに発表させるという予定であったが、作成に時間がかかり、実現できなかった。さらに、終末を迎えた「まとめ」の段階もチャイムが鳴り、十分に押さえることができなかった。

教師の問いかけに対する生徒の発言に対しても、どのようにコメントを返すか、迷いが感じられる場面があった。授業の流れに対して想定していない場合の対

処法の困難さを感じさせた。

エ. 4 例目 (授業者の専攻は美術教育)

〈授業の概要〉

学年組：高校2年ア組18名

教材名：「比較してみる絵画」

時間：35分

目標：美術作品の比較検討により、作品を分析的にみる。

〈授業の流れ〉

まず、3～4名のグループを作り、ムンクの「叫び」の図版を見て印象を話し合い、発表させた。続いてペーコンの「ベラスケスの『法王イノセント10世の肖像』にもとづく習作」の図版を配り、2つの絵の印象の違いなどをグループごとに話し合い、発表させた。

最後に、「叫び」だけ見たときの印象と比べ、比較によって作品の見方がより深まるとまとめた。

〈指導観察の結果〉

作品の選択に関して、指導者のねらいは感じられたが、生徒の印象や感想は指導者の予想をかなり逸脱したものなど多岐にわたっており、反応に戸惑う場面が見られた。比較鑑賞が効果的な方法であることを何とか生徒に理解させようと苦心していたが、生徒の反応から判断すると伝わりにくかったように思われる。

オ. 5 例目 (授業者の専攻は彫刻)

〈授業の概要〉

学年組：高校2年イ組23名

教材名：「ロン・ミュエク作品の鑑賞」

時間：25分

目標：鑑賞を通して美術作品の見方や感じ方を広げるきっかけとすることができる。

〈授業の流れ〉

導入では、人物が写っている写真を数点映して、本物の人間だと思えるものを紙に書くというクイズを行った。実際には、ほとんどがミュエクの彫刻作品である。

展開では、ミュエクの作品を解説しながら紹介した上で作者の制作意図を説明した。その後、様々な立体作品を紹介した。

〈指導観察の結果〉

導入段階での生徒の反応は大変よかった。

作品解説の途中では、生徒の間を歩きながら印象を尋ねる場面もあったが、近くの生徒とのやりとりが終わっており、全体に還元されることが少なかった。

ミュエクの作品に続いていろいろな彫刻作品を提示したが、漠然と見るに留まった。

②課題の抽出

鑑賞の授業においては、表現活動に比べて美術作品

の印象や感じ方を述べさせる場面が多い。したがって、発問の仕方や答え方について、対象とする生徒にふさわしい言葉や表現を選択しなくてはならない。しかし、実習生の場合、青年前期の発達段階がどのようなものかについて、自らの経験でしか判断できていないのが実情である。さらに、同じ学年においてもクラスによって雰囲気は大きく異なっている場合があり、同じクラスでも日によって同じ状況とは限らない。素早い判断が求められる。

また、授業に際して指導者の想定した感想や印象に沿わない感想や意見をどのように取り込むかという点に関して、予想される意見や感想を考えておくのは当然としても、経験的におおよそ把握している教員は、授業の舵取りを無難にこなしていく。しかし、実習生にとっては、いろいろ飛び出す発言に対して、過剰に尊重するあまりに授業の方向性を失い、時間ばかりを費やしてしまったり、指導案の流れを重視しすぎて切り捨ててしまう場合がある。つまり、柔軟に対応できるだけの余裕、換言すれば、教材に関する豊富な知識や考え方が不足しているといえる。

さらに、授業の組み立てに関していえば、実習生自身が鑑賞の授業を経験的に受けていなかったり、見る機会も無かったという点も課題である。見ることも経験することもなかった授業形態を自ら構築するという事は、言わば至難の業であり、数多く見聞きする中でこそ素晴らしい授業を構築できるわけである。したがって、今回自由に教材設定させたことにより、その自由度は増したものの、目指す授業像が明確に設定できていなかったということも推測できる。

その他、個々に関していえば、情報機器操作のスキル不足や教材作成の経験不足、40人を相手にしているという意識の欠如なども課題として浮かび上がった。

(森長俊六)

(2) 附属東雲中学校の事例

後期配属の実習生に対し、事前に実習中は鑑賞授業をすることを知らせ、その教材研究を行うように指示をしていた。授業で扱う教材については、各学年共通にするのか、それとも違う教材で授業を行うかは実習生の判断に委ねた。また、実習生が3名配属だったため、それぞれ1～3年を担当することにした。以下はその内容である。

①教材について

○教材名 「大竹伸朗展」(広島市現代美術館

2007. 9. 15. ～11. 25.)

○学年 1～3年(共通教材)

○実施時期 平成19年10月11日～12日

○教材の目標

- 1年…・作者の個性を感じ取り、多様な表現のよさを味わい、美術の見方を広げ、鑑賞に親しむ。
- ・作者の創作活動に対する態度や意識を感じ取る。
- 2年…・作家の様々な作品を鑑賞し、批評し合うことにより美術に対する見方や感じ方を広げられるようにする。
- ・ジャンルを超えた制作や、大竹伸朗独自の制作方法に触れることで、表現活動の幅広さを感じ、これからの制作意欲へとつなげるようにする。
 - ・創造活動に対する作家独特の態度や意識を感じ取り、これからの自分との関わりで美術の活動を考えさせる。
- 3年…・美術を身近なものに感じる。
- ・創造活動に対する作者の態度や意識を感じ取る。
 - ・ジャンルを超えた制作に触れることで、美術に対する見方や感じ方を広げる。

○授業概要 スライドによる作品鑑賞
ビデオによる鑑賞（「情熱大陸」

2007. 9. 9 放送）

ワークシートによるまとめ

②事前の様子

2週間の実習期間の最初の授業で鑑賞授業を行うことになった。生徒の実態がよくわからない状況で指導過程を作るのは大変困難であったが、SHRや部活動などで生徒達と接しながら少しずつ実態を掴んできた様子だった。また、この教材を設定した理由として、実習生達は次のことを挙げている。

- ・学校近くの美術館で展覧会が行われていて、生徒が興味を持ちやすいと考えた。
- ・作品のみでなく、表現活動も取り上げる価値があると考えた。
- ・個人的に好きな作家であるから。

授業と同時期に近くの美術館で開かれている展覧会を扱ったのは、生徒達にはより身近に感じられたと思われる。また、「絵画」という枠に縛られない大竹の作品群は、生徒達の美術に対する固定概念を覆すほどの強い刺激に成りうるだろうと考える。そして、何より授業者がその作家を敬愛する気持ちは、何らかの形で、生徒達に伝わるものと信じる。

③授業の様子

（1年）スライドによる作品鑑賞では、やや授業者の一方的な説明が気になった。2クラス目の授業では、その点を意識し、生徒達の表情を見

ながら話をする努力がみられた。

- （2年）スライドで作品を見せながら、発問し、それに対する生徒の発言に対する言葉を受け止め、次の発問につなげていこうとしていた。
- （3年）スライドで作品を見る時点で、生徒達の自発的な感想が次々とでてきて、それに対する受け答えをしつつ、説明をこなそうと努力していた。

また、授業で使用したビデオは以前民放で放送された番組を編集したものであり、作品や作家の考え、生き様を非常にわかりやすくコンパクトにまとめている。時間的にも適切であり、生徒達も意欲的に視聴していた。

大竹さんの作品はどれもとてもおもしろく、驚くものばかりでした。特に材料がさまざま、雑誌の切りぬきや楽器やくつなどびっくりするものばかりでした。そして巨大なパネルに絵の具をちらし豪快に筆を動かしているときも「何を作っているか自分でもわからない。特に何も考えていない。」という話にはとてもびっくりした。完成まで考えていると思っていたけど絵を描きたいというしょう動で描くというのをきいて、私は自由を感じました。（中略）「何が芸術の定義かいえる人はいない。毎日人の価値はかわる。」という言葉には心がひかれました。ぜひ実際に大竹さんの作品を見に行きたいなと思いました！！

【2年 生徒の授業後の感想】

④成果と課題

各クラスの授業終了後、生徒達から「美術館へ行きたい。」との声が、幾人も出てきていた。実際に行った生徒も十数名おり、中には大竹伸朗本人が講演で来る日に合わせて行った生徒もいた。

この前学校の授業で見た作品がすごくおもしろかったので行ってきました。一番思ったのは、やっぱり実物はちがうなあーということです！（中略）実際見た方がやっぱりよく伝わるなあと思いました。

【生徒の鑑賞レポート①】

少し前にあった実習生の授業で、大竹伸朗について興味をもったので行ってみました。大竹さんは自分の製作に関して「既にそこにあるもの」との共同作業と言ったことがあるらしい。確かに前授業でビデオを見た時もそのようなことを言っていたと思い出した。

【生徒の鑑賞レポート②】

授業後、実際に美術館へ足を運んだ生徒がいたという事実は、実習生の取り組んだ授業が生徒達に影響を与えた証であると言える。身近な美術館での展覧会を取り上げたのは、生徒達にとって興味をもちやすく、「大竹伸朗」という作家の表現方法、作品、生き方は、中学生という年代の子ども達にとって、強烈な印象となったのではないだろうか。教材の目標であった、美

術に対する見方や感じ方を広げることはでき、成果はあったと言えよう。

しかしながら授業の内容を振り返るとき、いくつかの課題点が浮かび上がる。教育実習を通して明らかになった課題は次の4点であった。

- ・上記の鑑賞レポートの感想にあるように、ビデオの効果はとてもし大きかったと言える。鑑賞授業の場合、視覚教材を使用するのは大変有効であるが、今回は放送された番組を編集して使用しており、その番組構成が上手く作られている故、授業者は苦勞することなく、作家の思いを生徒達に伝えることができたのである。これも一つの手段であるが、実習生の授業として適切であったかは課題として残る。
- ・2週間で最低5時間の授業を実施しなければならぬ中で、実習生達が生徒の実態を充分把握できないままに、指導案を作成するのは厳しいと感じている。5教科に比べ週当たり授業時数が少ない美術科では、必然的に生徒達と関わる時間が少なくなる。特に鑑賞の授業の場合は、制作場面での個別指導と違い、集団としての生徒達とのやり取りが多くなる。同じ学年でもクラスによってその特色は違う。実習生に行ったアンケートにおいても、生徒観がわからなかったため、教材選びや授業構成に苦心したことがうかがえる。事前に担当教員と充分な連絡をとり、大体の生徒の実態を把握した上で、鑑賞の授業に取り組む必要があるのではないだろうか。
- ・実習生に行ったアンケートの中に、鑑賞教育がどのようなものか、また、鑑賞の授業がどのような授業なのかわからなかったため、悩んだ様子があった。その原因として、実習生達自身が鑑賞教育を受けてなかったため、イメージしづらいことが考えられる。大学での授業、または附属校での観察実習等で鑑賞授業を体験、観察しておく必要があるのではないか。また、実習生を始め学生は、日本・西洋美術史の基本的な知識は最低限もって実習に望んで欲しいと願う。
- ・鑑賞教育と限らないが、生徒達と対話をする場面で、顔を見て会話をすることが苦手な実習生がいた。教師としてだけでなく、社会人として必要不可欠なコミュニケーションスキルを身に付ける必要がある。

(3) 附属三原中学校の事例

附属三原中では、実習生1名に対し、3年生2クラスで写真芸術に関する「独立した鑑賞の時間」を全1時間扱いで行うよう指示した。

3年生84名は、実習生が担当した授業の前に、デジタルカメラを使って校内の「心に響いた風景」を撮影し

ていた。実習生の指導者としては、今回の授業で次の2点を押さえた内容の授業展開をしてほしいと考えていた。

- ・写真も芸術の一分野であることを実感する。
- ・直前の自分たちの活動と比較し、より我が身にひきつけて、写真を撮ることが自己表現になりうることに気付く。

実習生にはこのねらいを伝え、よく考えて目標を達成できるような教材を選び、指導内容と評価方法を考え提案するよう実習開始の約2週間前に指示をした。しかし、実習生が実際に教材を決めたのは授業実施日のわずか5日前であった。また、指導案に至っては当日まで納得のいくものは仕上がらなかった。

授業当日に至るまで指導を繰り返しながら痛感したのは、実習生の鑑賞教材研究力の不足である。端的に言えば「その教材を鑑賞させることで、子どもに何を感じさせ、考えさせ、語らせたのか」を、明確にする力がないということだ。そこを明確にできないままていくら授業方法や学習形態を考えようとしても、根っこになる部分が不十分なままでは考えもまとまらず指導案もちぐはぐなものになってしまうだろう。

実習生は写真家・本城直季による写真集『small planet⁷⁾』から数点を選んで子どもに見せたいと相談に来た。本城は風景写真の中心部だけにピントを合わせ周囲をぼかした「アオリ技法」で一躍有名になった写真家である。その作品は本物の風景写真であるにもかかわらず、一見するとミニチュアやジオラマをいかにも本物らしく撮ったかのようにも見える。

実習生は、本城の作品4～5枚をカラーコピーして班毎に配り、じっと見させるつもりだと提案してきた。見させた後にどうするのか聞くと、どう感じたかそれぞれ自由記述でワークシートに書かせ、そこからは発表・交流させて出てきた意見によって臨機応変にまと

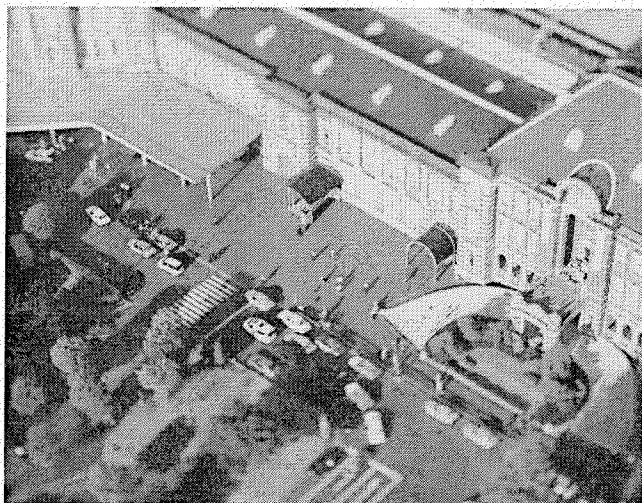


図1 本城直季作品の一例「東京駅」

めをし、授業を終了するつもりだと言う。

子どもから何を引き出したいのか、何を感じさせたのか、言い換えれば子どもがワークシートに具体的にどういう記述をするかの予想を、実習生はまるで立てていなかった。ましてや授業形態の工夫など全く頭になく、「発表、交流」という非常に形式的な展開で何とかなるのではないかと考えていた様子であった。

これはおそらく、実習生本人がアンケートにも記述していたように、自身に鑑賞の授業を受けた経験がなく具体的な授業イメージを持っていないことが第一の原因であると思われる。しかし、持っていないのであれば、己の想像力をフル回転させて子どもの感じ方を予想したり、どのような意見交流方法があるのか他教科の授業案を参考にして考えるなど、いくらでも前向きに授業を構築することができるであろう。

独立した鑑賞の時間で扱う教材を決める場合、鑑賞対象に作者が居るのであればその経歴・作品傾向や特徴・制作に対する考え方などを研究し、作品そのものの制作背景を調べ、自分で作品を見て感じたことや考えたことを分析し、その分析と中学生が感じるであろう思いとの相違の有無を予想し、教材が子どもの発達段階に適しているか検討し、授業で扱うか扱わないかを決める。

これらを「教材研究力」と名付けるとしたら、実習生はあまりにその力を持っていないと感じられる。

今回の実習生は「教材研究でどのようなことをしたか」というアンケートの設問に

インターネットで検索したり、先生から借りた鑑賞学習の本⁸⁾を参考にした。

と回答しているが、鑑賞教材に限らず、基本的な教材研究の方法を知らないまま実習に臨んでいるのではないかという印象を抱いた。また、知らないのであればと、「これこれこうやって教材研究しなさい」と前述の方法論を指導した。しかし「あなた自身は美術作品の鑑賞経験が豊富か？」という設問に「それほど豊富でない」と答えているように、1つの作品についてそこまで深く考えたり検討したりする経験に乏しいためか、最後まで指導者の期待に応えるには至らなかった。

綿密な教材研究があった上で、初めて授業をどう構築するかを考えることができる。作品を見ることで子どもの心に起きるさざなみを、個々で深めさせるのならどう深めさせるのか、あるいは共有させるのならどう共有させるのかなどを考え、授業スタイルや教材提示の仕方、発問、指導の手だてなどを煮詰めていくわけだが、今回の実習生は残念ながら独創的な授業を構築することはできなかった。

実際に行った授業では、前述した「見させて、自由

に書かせて、意見を発表させて、最後に授業全体の感想を書く」という、極めて形式的な授業に成らざるを得なかった。しかも教材研究が不十分なため、子どもの意見に対して実習生は「そうですね」「他にありませんか」などのような言葉がけしかできない状況であった。

最後にまとめとして、実習生自身が本城のプロフィールなどを読んで感じたことを自分の言葉で語る場面が設定されていたが、子どもたちが前半の意見交流で出した内容について深めていないため、学習の自然な流れに沿わない大変唐突なものとなり、まとめとして適切なものではなかった。

●生徒から出た意見

- ・見た瞬間にはミニチュアの写真かと思ったが本当の風景だと聞いてびっくりした。
- ・どうやって撮ったのか不思議に思った。
- ・こんな写真を撮ろうと思いついたのはすごい。

●実習生の語った「まとめ」

- ・本城は「都市のウソっぽさ」を表現しようとしている。
- ・「都市の嘘っぽさ」を彼が自覚したのは14歳の時で、それ以来ずっと同じテーマを追い続けている。
- ・中学生の時に感じた感覚はこれからも大事にして欲しい。

今回の実習生は、アンケートで

- ・教材研究の仕方が分からなかった。
- ・鑑賞の授業についてあらかじめもっと学んでおきたかった。

と答えている。

おそらく多くの実習生が似たような状況であると思われる。実習生の教材研究力不足を嘆く前に、その実態を考慮して教材研究の考え方や方法をもっとかみ砕いて指導できるよう、指導者側も準備をしておく必要があったと感じている。(大和浩子)

(4) 附属東雲小学校の事例

①『アクティブ鑑賞』

子どもたちが自らの興味関心に基づいて身の回りの様々な対象を見つめ、向かい、探求する。そして時には、表現などのクリエイティブな活動と結びつけながら能動的に鑑賞を深める。本校図画工作科ではこのような鑑賞の在り方を『アクティブ鑑賞』と銘打ち、受動的なイメージで捉えられがちな従来の鑑賞学習からの脱却をめざした研究を行っている。そこで教育実習に際しても、子どもたちに何をどのように鑑賞させるのかということについては完全に学生の主体性に委ねた上で、必ず鑑賞教材を準備しておくよう伝えた。こ

ここではアクティブ鑑賞をめざして授業づくりに取り組んだ実習生の鑑賞学習に対する意識の変容と、実際に鑑賞の授業を行うにあたっての悩みや問題点の所在についてアンケート調査の結果をもとに述べる。(対象実習生 大学3年生17名)

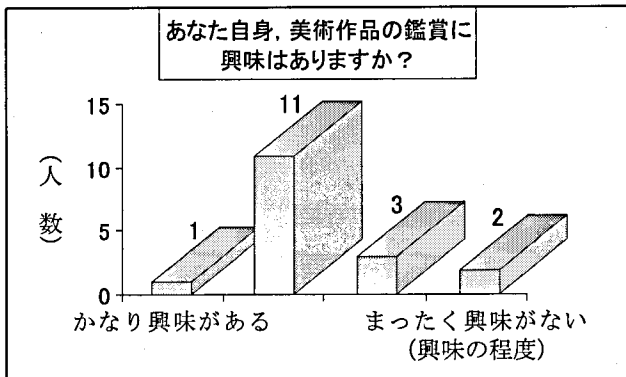


図2 アンケート項目1-1

この結果から美術鑑賞そのものに対する学生の関心度はかなり高いことが窺えるが、肯定的な回答を寄せた学生(計12名)は次のような理由を挙げている。

「美術作品を見ているとほっとする。落ち着く。」

「いろいろな絵との出会いが単純に楽しい。好き。」

「自分とは異なる表現に対して感動を感じる。」

「自分にはないものを吸収でき、表現の参考になる。」

これに対して、否定的な回答(計5名)を寄せた学生の挙げた理由は次の通りである。

「鑑賞というとなかなかイメージがある。」

「鑑賞の授業を通してあまり絵のよさがわからなかったし、何を求められているのかわからなかった。」

「美術作品のよさはこれだ、と強制されてきた。」

「何をもちて鑑賞とするのかわからない。」

鑑賞に興味を示した学生が、美術作品との出会いそのものを主体的に楽しんでいるのに対して、興味がないと答えた学生については、これまでに受けた鑑賞授業の体験がマイナスに働いているものと考えられる。指導者の価値観を押し付けられているように感じたり、固定化した理解を求められたりした結果、彼らの鑑賞学習は必然的に受動的なものとなり、興味・関心の低下につながっているのではないかと推察される。

また、「心に残る鑑賞の授業があるか」という設問に対して6名の学生が「ある」と回答しているが、その時期は小学校高学年から中学校1年生までに集中している。その内容は、「戦争とゲルニカ」「ゴッホ作品に見られる浮世絵の影響～ジャポニスム」といった絵画の読み解きの要素を含んだ探求学習、版画などの表現活動を取り入れた学習、あるいは美術館を訪れての自由な鑑賞活動など、アクティブな魅力に富んだもの

であった。このことから、小中学校における豊かな鑑賞体験の重要性が改めて浮き彫りになった。

②実習生による鑑賞指導の実際

A. 教材設定について

今回は1年生、4年生、6年生で計4つのグループによる鑑賞の授業を行ったが、どのグループも25～30時間以上の時間をかけて教材研究を行っており、時間的には十分であったと回答している。各グループの選んだ教材は次のとおりである。

○第1学年「かくれみの里より～40人のこすり忍者 参上」

・フロタージュを通して触覚に焦点化した鑑賞活動

○第4学年「色による印象のちがいを感じ取ろう」

・「メランコリー」(ムンク)を素材にして背景の色の違いがもたらす印象の違いを感じ取る学習

○第6学年「マネをマネよう」

・「マネとマネ婦人」(ドガ)を素材に、切り取られた部分について自由に想像をめぐらせる学習

○第6学年「見たことのない鉛筆の世界へ」

・鉛筆による細密画を鑑賞し、表現活動へ広げていく学習

教材設定の理由については、扱った教材に関わらず多くの実習生が、「個々による感じ方の違いに気付かせなかった。」「お互いの感じ方のよさを認め合えなかった。」と回答しており、一人一人の子どもが互いの感じ方を交流し、認め合うことを主な目的とした授業づくりをめざしていたことがわかる。

I. 授業を行ってみて

「本授業で授業者の意図は児童・生徒に伝わったと思うか」という設問に対しては、「どちらともいえない」とした2名を除いて、他の全ての実習生は「伝わったと思う」と回答している。これは授業中の子どもの発表やつぶやき、ワークシートへの記述内容から実感として得た手応えであり、膨大な時間をかけて行った教材研究が実を結んだ喜びである。

しかし、評価となると問題はまた別である。授業実施前には、発表や授業態度、行動観察、ワークシート、作品表現等から個々の鑑賞の深まりを見取ることができると考えていた学生が多かったが、実際に「評価できたと思いませんか」という設問に対して「そう思う」と答えた学生は2名にとどまった。その他は「まあまあできたと思う」「半分くらいはできたかなと思う」など曖昧なものに加え、「評価は難しかった」「きちんとは評価できなかった」「発言からは評価できなかった」「評価のことは頭になかった」という回答も見られ、現実問題として評価までは難しかったと思われる。

授業を見る限りにおいても、評価の場面はほとんど設けられていなかった。

ウ. 実習生の悩み、願いや見えてくるもの

「教材を設定する際に悩んだ点、苦労した点は？」という設問に対しては、「発問の仕方、内容」「教材の提示の仕方」「授業の進め方」「どのような鑑賞材を選べばよいか」「見つけた絵が、対象児童に合ったもの（児童の発達段階に応じたもの）であるか」などの回答があった。実際に教壇に立った時にどのような発問を投げかけ、どのように授業を展開していけばよいのかという素朴な疑問、そしてまだ見ぬ児童の反応に対する不安が窺える。

また、「鑑賞の授業に関わって、大学で学んでおきたかったことは？」という設問に対する回答は、「実際の鑑賞の授業の中で児童から出された意見をどう扱えばよいか」「どのように子どもの興味を引けばよいのか」など具体的な指導技術にかかわるもの、「鑑賞とは何か、何のためにするのか」「どのようなところに気付かせればよいのか、どんな見方があるのか」という鑑賞学習の意義そのものにかかわるものに大別された。

学校教育における鑑賞の授業にあまり良い印象を持っておらず、普段の生活の場面でも、鑑賞経験の少ない学生の実態をふまえると、まず、鑑賞学習の目的と意義について押さえる必要があるのではなかろうか。さらに、実習生が扱うに適した教材や実践事例等が系統的にまとめられ、事前に指導されることが望ましいと考える。

③成果と課題

実習生は、鑑賞の授業を行うことで鑑賞に対する意識が変わったと答えている。具体的には次のような内容である。

「鑑賞の授業は楽しいものと思った。(複数)」

「身近な教材で鑑賞ができることがわかった。」

「単に名画だけでなく、美術品の多くが鑑賞の対象になることがわかった。」

「ただ見せるのではなく意図を持って教材を選ぶこと、その意図を伝えるための手立ての重要性を感じた。」

「製作の前に鑑賞を行うことで、様々な表現技法を身につけることができたと思った。」

「表現と鑑賞は切り離せないものであること、また、表現活動の中にも、鑑賞を位置づけることができるということがわかった。」

「今まで嫌いだった図工が好きになった。どういう授業をすれば子どもが喜んでくれるのかと考えるようになった。」

これらの言葉から、これまでの自分の鑑賞に対する

意識の変化や、自らが授業づくりをすることを通して、自分たちが受けてきた鑑賞の授業とは違った認識が、生まれてきたことがわかる。また、一般的な「名画鑑賞」というイメージから離れて、鑑賞という活動をより幅広く捉える視点を持つことができるようになっていくのがわかる。さらに、子どもの喜ぶ顔を思い浮かべながら授業の準備に勤しむ姿からは、実習生から教師へ向かう意識の高まりを感じ取ることができた。

(天野紳一、川口 浩)

(5) 附属三原小学校の事例

附属三原小学校では、5名の実習生が鑑賞の授業を実践した。5名とも大学においては美術教育を専門分野としていない。さらに、今回の考察・分析については5名という少人数を対象としていることから、これが全ての実習生にあてはまる課題とは言い難いが、以下報告する。

【教材名】

3年「光と色のファンタジー」

4年「あかりたちのゆめ」

【鑑賞の内容】

完成作品の相互鑑賞

【時数】

1時間(3年)、2時間(4年)

①現状の課題

課題1：教育実習生自身の鑑賞教育の経験が少ないこと

実習期間中、対象実習生にアンケートを行った。各設問に対して「とてもある」「ある」「あまりない」「ない」4段階選択回答方式をとった。

「美術作品に興味があるか」については4名が「ある」1名が「それほどない」と回答した。

また、「美術作品の鑑賞経験が豊富か」は、「ある」1名「それほどない」3名「ない」1名であった。

さらに、「心(記憶)に残る鑑賞の授業の有無」については全員が「ない」と回答した。「鑑賞の授業について、児童・生徒の時にはどのように思っていたか」については、「とても楽しい」1名、「どちらでもない」2名、「楽しくない」2名であった。

彼らが児童・生徒であった1980年代後半当時の美術教育の実態から考えると、独立した鑑賞の時間が行われていなかったことは容易に考えられる。それにしても、完成作品の相互鑑賞に対する経験(記憶)があまりに薄い現実を背負ってきていることが伺える。

課題2：鑑賞の学習の教授理論を学ぶ場が十分でないこと

「鑑賞の時間について、悩んだ点、苦労した点」に

ついて、4名が、「どのような場を設定して鑑賞させたらよいか」、「何を感じさせたらよいか」について悩んだと回答している。美術教育がともすれば、制作のみを重視しがちであることの現れではなからうか。われわれは、美術教育とは「美術の教育」と「美術を通しての教育」があることを再認識し、これら2つの教育が相互に絡まり合って児童・生徒の美的感覚や人間性を高めるという目標をもっと強く発信しなければならないと考える。少なくとも、これから2年後、教育現場で人を育てるであろう教育実習生については、教授方法はいかにせよ、その教授理論についてはしっかりと学び考えさせる機会を与えるべきである。

②実際の実習授業からみえてきたこと

ア. 3年「光と色のファンタジー」より

本鑑賞の時間の授業をした実習生は、鑑賞の経験が「豊富である」と回答し、さらに鑑賞について、事前に大学教授に自ら進んで学びに行っていた実態があった。

本教材は、色セロハンを様々に貼り合わせて作品を制作し、太陽の光にすかせて見える多様な色や形の美しさを最後に鑑賞しあうという教材である。鑑賞の時間では、子どもたちの作品をジャングルジムに様々に展示させ、多様な方向から光を通してみる作品の美しさを味わわせようと試みた。いわゆる「美術の教育」である。さらに、40名全員の作品を集合体としての作品と捉え、みんなで1つの作品を作り上げ鑑賞するという醍醐味をも味わわせることをねらった。まさに、人と協力することの大切さも実感させることができる「美術を通しての教育」を実践した時間であった。授業では、児童が生き生きと活動し、夢中になって「みせ方」を考え「みる」ことを楽しんだ。このような授業内容は、前述した彼自身の経験と大学での学びの中で構築されてきたものではなからうか。

イ. 4年「あかりたちのゆめ」より

材料や形を自分があらわしたいように工夫して、ランプシェードを制作する学習である。完成作品の鑑賞会の持ち方について「どのような方法・場を設定すればよいか全くイメージがわからない」、同時に「鑑賞することを通して子どもたちに何を感じさせるべきか」についても迷いを持っていると相談を受けた。

本鑑賞の時間の授業をした実習生は、自分自身鑑賞についての興味が「ない」と回答し、鑑賞の経験が「あまりない」と回答した。また「教材研究をどのようにしたらよいか分からない」と思っていた。

そこで、まず実習生自身にあかりの美しさを実感させようと、様々な闇夜に浮かび上がる美しい灯りの画像や映像を一緒にみて楽しむ時間を作らせた。ハード

スケジュールの実習期間をつかの間忘れ「うわあ、綺麗ですね。」と心を和ませた様子であった。その後、子どもたちにもこんな気持ちを味わわせてやればよいのではないかと話し、そのための場の設定について検討を始めた。

実際の授業では、図工室の暗幕を閉め、机を様々に積み上げ白い布で覆った作品展示用の台を作り上げ、子どもたちに自由に作品を展示させたいという案で臨んだ。暗闇に1つだけ自分のランプを点灯させてそのあかりの美しさをじっくりと鑑賞させた。この時実習生は、きっと子どもたちから「全員のランプを一斉に点灯させてみたい」という声上がるであろうという予測のもとに授業を進めていた。案の定「みんなであかり」という案が子どもたちから出され実行してみる運びとなった。もちろん、40個のあかりの集合体の美しさは、子どもたちを感動と興奮の渦に巻き込み、授業は大盛況の中で幕を閉じた。授業後の授業者の感想である。

「私の力ではなく、児童たち自身が作り上げた鑑賞会という印象を受けました。また、子どもの喜ぶ顔や『本当にやってよかった』という感想から、充実感を得ました。そして、なにより自分自身が楽しむことができた授業でした。鑑賞はとても楽しく図工の醍醐味だと思いました。」

ここで記述された「自分自身が楽しむ」という一文に注目したい。このことから「みることを楽しむ」ことを、授業者自身が経験することが、鑑賞の時間を充実させる何ものにも代え難い「原動力」となるのではなからうか。(岡 芳香)

3. まとめと今後に向けて

教育実習生がしばしば口にしたり、また他から指摘されたりする経験不足は、教育実習生にとって宿命である。経験不足に由来する困難を乗り越え教育実習の場で経験を積むのが、いつの時代も教育実習生としての学びである。また生涯にわたって学び続ける態度は、教員に求められる姿勢や資質の一つでもある。

今年度実施された教育実習において、教育実習生が鑑賞学習を行った授業を観察した。本稿でも授業の概要が報告された。以上をふまえて判断すれば、教育実習生の多くは自分の経験不足を克服し授業を児童・生徒の興味を惹く質の高いものにしようと健闘していた。これらの認識の上に、教育実習の質をさらに高めるために克服すべき問題点と課題を、次のように整理した。

〈問題点〉

(1) 学習目標が適切に設定されないこと

鑑賞の授業実習では、附属教員による指導のもと、教育実習生によって比較的自由に教材などが決定されている実態が明らかになった。しかし教育実習生によって自由に設定された学習目標が、教育実習期間外の教材系統性や児童・生徒のあるべき姿の軸をふれさせてしまうのでは問題である。学習指導要領において示される目標に基づいて、学習目標を適切かつ明確に設定することが求められる。

(2) 鑑賞学習に対するイメージの欠如

鑑賞学習に対するイメージの欠如は、大学においても十分に認識している。克服のために、テレビジョンで放映されたり研究会で公開されたりした優れた鑑賞授業を視聴させ、その工夫点について集団討論などを通じて検討させてきた。また学習指導案の作成を行って授業づくりの視点と方法を獲得させてきた。多くの教育実習生は、これらの学習をふまえて子どもたちの興味・関心に基づく授業の工夫を行っていたようだ。十分ではない状況にあるが、継続する必要がある。

(2) コミュニケーション力の不足

コミュニケーション力は、人間を相手にする教員にとって不可欠の能力である。大学の授業では、集団討論などの場を設けて、自分の考えを他に伝えるようにさせているが、十分に効果を上げているとは言い難い。実習中はクラス配属などで児童・生徒の実態を把握しつつ、コミュニケーションを取ることのできる環境整備が求められよう。また、教育学部が教員養成や教員の主目的養成を行う目的学部であることを考えれば、教職に対する関心・意欲、コミュニケーション力などを考查対象にするような入学試験の方法及び内容の再検討が必要かもしれない。

〈課題〉

(1) 教育実習において実習生が担当する授業を自由に決定させることが適当かどうかの検討

教育実習で自由に教材作成を行うことが適切か、それとも一定の指導の型を与えず体験することが適切かといった問題を、現代の教育実習生像をふまえて検討することが必要である。教育実習において一定の質を保った授業を行うことは、教育実習生による授業を受けなければならない立場にある児童・生徒の学習権を保障することにもつながる。

(2) 教育実習において授業の視点を焦点化して示し、観察を容易にするための観察録などの検討

経験不足の教育実習生は授業全般に対するイメージが十分に定着しておらず、授業を観察する時、無目的

にただ漫然と観察することになりがちである。附属で授業観察をする際に、授業づくりの視点を明確に示した観察録などの作成と使用によって、授業づくりの視点を獲得することが容易になると期待される。

(3) 自分自身が行った授業を振り返るためのVTR撮影・視聴や批評会の充実

一部の附属ではすでに実施し効果を確認している。教育実習生の行った授業を客観的に観察することによって、初めて自分自身の課題を認識することができる。予算措置が必要だが、導入を試みたい。

(三根和浪)

引用(参考)文献

- 1) 新関伸也「小・中学校における鑑賞学習の実態と考察」『大学美術教育学会誌』第37号, 大学美術教育学会, 2005年, p. 311
 - 2) 石川 誠「ニューヨーク近代美術館のティーチャーズ・ガイド」『美術教育学』第26号, 美術科教育学会, 2005年, p. 65
 - 3) 野上雅志「鑑賞授業実践研究I」『大学美術教育学会誌』第39号, 大学美術教育学会, 2007年, p. 263
 - 4) 文部省『小学校学習指導要領解説 図画工作編』(株)日本文教出版, 1999年, p. 4
 - 5) 文部省『中学校学習指導要領解説 美術編』(株)開隆堂出版, 1999年, p. 5
 - 6) 文部科学省HPにおいて配付資料として公表中 http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/news/20080117.pdf (2008年1月17日)
 - 7) 本城直季『small planet』リトルモア出版, 2006年
 - 8) 菅村 亨, 大和浩子, 半 直哉, 江本繁子『生き生き鑑賞学習のすすめ』三好印刷, 2003年
- 福岡市立美術館・広島市現代美術館・大竹伸朗「大竹伸朗 路上のニュー宇宙」大竹伸朗展実行委員会, 2007年
- 広島大学附属東雲小学校『小学校教育に求められる基礎・基本を問う—ループリックに基づく指導と評価』東洋館出版社, 2006年
- 若元澄男 編『21世紀の初等教育シリーズ7 図画工作科教育学』協同出版, 2002年, pp. 5-18
- 若元澄男 編『図画工作・美術科 重要用語300の基本知識』明治図書, 2004年, p. 15